

「今を生きる禅文化」展に

寄せて

26日まで歴史民俗資料館 上

日本臨済宗史の中で、特筆すべき活躍をした禅僧が土佐の国より多く輩出された。その要因は夢窓疎石が、高知市の五台山麓に吸江庵（現吸江寺）を創建したことであろう。

夢窓は、天龍寺の開山となり、「七朝帝師」と尊称されるなど、日本禅宗史上、最も優れた禅僧の一人としてその名が挙げられる。31歳で師匠から印可を受けた夢窓は、以後20年以上の長きに渡り、隠棲修養の生活を各地で送った。文保2（1318）年、44歳のときには、土佐で「吸江庵」と名付けた庵を結ぶ。夢窓の土佐滞在は、鎌

花園大学国際禅学研究所研究員 瀧瀬 尚純

倉幕府14代執権・北条高時の生母、覚海田成尼の半ば強制的な鎌倉招請により、2年という短い期間で終わりを告げた。しかし、夢窓が吸江庵を建て、土佐に臨済禅の礎を築いたことにより、当地

土佐は臨済禅の聖地

から禅を志す出家者が多く出ることとなるのである。

五山禅林で活躍した義堂周信と絶海中津は、共に高岡郡津野町出身。出家を志した2人は、吸江庵を通してもたらされた夢窓の活躍を親しく聞いていたのであろう。



展示されている絶海中津の肖像画（慈濟院蔵）

土佐は臨済禅の聖地

時期は前後するが、共に遠く京都・嵯峨野の臨川寺や天龍寺に住していた。

た。夢窓の元へ投じて、弟たりとなり禅修行を始めていた。彼らの足跡は、川寺や天龍寺に住していた。任するが、数度帰郷を果して位置付けられていた。ことは想像に難くない。

料館で開催中の特別展「今を生きる禅文化」で展示されている。

禅界を代表する夢窓・義堂・絶海を由緒とした吸江庵は、当時四国にお

五山僧が継続的に渡来することにより、土佐や四国に臨済禅を展開する中心地となり、優秀な禅僧を生み出す役目も果たした。夢窓が結んだ小庵は、時を経て、日本臨済宗の地方展開を考える上で、重要な位置を占める寺院となったのである。

に移って、師の語録「蕉堅菓」の編さんに力を尽くした。また、相国寺・南禅寺の住持を務めた大周周翁が吸江庵に滞在している時には、若き日の養叟宗頤がその門を叩いたという。養叟は、後に大徳寺住持となり、その筆頭として教団発展に尽力したが、その抜群の働きが故に、同門で後輩の一休宗純から厳しい批判にさらされたこと知られる。

このように、吸江庵は、中世において有力な五山僧が継続的に渡来することにより、土佐や四国に臨済禅を展開する中心地となり、優秀な禅僧を生み出す役目も果たした。夢窓が結んだ小庵は、時を経て、日本臨済宗の地方展開を考える上で、重要な位置を占める寺院となったのである。

26日まで 県立歴史民俗資料館

顎隠慧叟は晩年、吸江庵